

ノモンハン事件後の満蒙国境画定の経緯

(ハンダガヤからソヨルジ山まで)

「福岡市総合図書館 2021 年度利用者研究成果」

軍事史研究家 日名子健二

1. はじめに

満洲国(日本支援)と外蒙古(ソ連支援／現モンゴル国)との国境が不分明のため、ハルハ河を挟んで行われたのがノモンハン戦^①である。ソ連軍の勝利により、戦後の交渉で外蒙古側主張の通り、ノモンハン付近(ホルステン河^②流域方面)ではハルハ河東岸 10 から 20Km が国境線と画定した。

この時の交渉で、ハラト山^③付近からアマラルティン・オーラ^④(以下オーラを略す)を経てソヨルジ(素岳爾濟)山^⑤に至る国境線も画定した。しかし、その経緯については「…国境線のうち大部を占めるホルステン河流域方面の境界は、事件前からソ蒙側が主張していた線とし、これに対しハンダガヤ^⑥方面のそれは、かなり日満側の要求が容れられたという次第であった。」[戦史叢書関東軍<1>(1969)]という程度である。そこで本論文は、従来研究者があまりとり上げなかったハンダガヤからソヨルジ山に至る国境線の画定経緯について述べるものである。なお、地名、山岳、河川等の位置は、できるだけ緯度経度を示し具体化した。

- ① 1939 年 5 月、本事件の契機となる紛争発生(5 月以前も小紛争は頻発)、戦闘のピークは 8 月中旬、9 月 15 日停戦協定成立。近年ソ連側の被害も大きく、日本側が一方向的に敗北したのではないとする主張もある。
- ② ハイラスティン河 呼拉斯台とも云う。緯度経度 47.717195,118.690599
- ③ キリル文字表記 Х а р а т (標高 1070m) 緯度経度 47.409760,119.405885。直ぐ北方にフロン山(標高 952m) がある。
- ④ キリル文字表記 А м а р а л т и н , アムラルトとも称す。国境指標(地区番号) 17 の 132 号, 指標 16 から南南東 7.65Km 緯度経度 47.06667,119.8 標高 1179m。オーラ(У л а)とは山の意味。
- ⑤ 素岳爾濟, 索岳而濟, キリル文字表記 С о ё л д э (С о ё л д э) ・ С о ю л ц з н . 満洲地名考(1982)では、キリル文字のソオヨルテを漢語當字で素岳爾濟と記し、その意味を「猪の牙、鹿の角の如く尖れるを索岳という」と述べている。内蒙古(支那チヤハル省)、外蒙古、満洲国の三国境にあるというのが、詳細は後述する。

⑥ 罕達蓋, 哈達該 緯度経度 47.468656,119.441155

2. ノモンハン戦前(1930年以降)におけるソ蒙側の国境認識

巴爾虎(バルガ/ハルハ河東及び北岸に居住), 哈爾巴(ハルハ/ハルハ河西及び南岸に居住) 両族の勢力争いに対する清朝政府の裁定(1734年)や道光29年(1849年)の一部修正を清朝滅亡後(1911年)も踏襲。本裁定は元々清国内部の行政区境の決定で, 何ら外部(外国)に与える問題ではなかった。しかし, バルガが満洲国, ハルハが外蒙古・モンゴル人民共和国に属することになった結果, 国際(国境)問題となった。

1734年の裁定における部族境は, ノモンハン付近はハルハ河東方20Kmであり, ソ蒙側はこれを国境と認識していた。また, ハンダガヤ以南もハラト山から伊爾施西^⑦, ウンドゲン^⑧・オーラ・オボ, シヤラオレ^⑨, ツァガン^⑩・オボ, ソヨルギー・ボグト^⑪・オーラを結ぶもの(図1「米軍にあった唯一の古地図の写し」による)が部族境で, ソ蒙側はこの線を国境と認識していた。

⑦ 露名 Р а з в (Р а з в а л и н а 遺物の省略形)

緯度経度 47.28498,119.804846.

⑧ キリル文字表記 У н ђ г э н , 標高 1368m, 緯度経度 47.140756,119.897243. オボとは石や木枝を積み重ねた道標(目印)の意味。

⑨ キリル文字表記 Ш а р а - О р о й 1344高地。関東軍測量図では1343高地。緯度経度 46.976348,119.869199.

⑩ キリル文字表記 Ц а г а н , 1366高地 緯度経度 46.833201,119.943436. 大堀(2016)が示す地点は間違いである。関東軍測量図では1344高地。

⑪ ボグト(キリル文字 б о г д)は漢語で博克圖と表記し,「円形の山丘又は聖仏」を意味する。

3. ノモンハン戦前(1930年代)における日満側の国境認識

満洲国の成立後, 日満議定書(1932年9月締結)により, 日本軍は満洲国の防衛を担うことになり, 東部ソ満国境は関東軍がソ連軍と直接対峙した。一方, 満洲国と外蒙古の国境線の防衛は, 満洲国軍国境守備隊が主体となって行われていた。満洲里会議(1935~1937年)でも国境画定に関する議論が行われたが, 結局もの別れとなった。

国境線について日満側は, 1906年に帝政ロシア陸軍が作成した地図のハルハ河に準拠し, 1935年頃まで, ハルハ河を外蒙と満洲国の堺と認識していた, しかし, 以後下記のような調査・報告があり, 日本軍(関東軍), 満洲国でもそれぞれ解釈が異なっており混乱していた。

「満蒙国境要図」(1937年8月末 関東軍作成)…**図2**

関東軍参謀長東条英機から陸軍次官梅津美治郎へ提出。国境線はハルハ河東方10から20km, ハンダガヤ以南の三角山(後述)付近もソ連側の主張通りとなっている。しかし,

ハルハ廟は満洲国領としている。

「満洲国政府国境現地調査」(1937年6～9月 興安北省, 治安部, 外交部, 三機関の合同調査, 外交部の北川四郎^⑫も参加)

北の満蒙ソ三国境界から南の満蒙支三国境界まで全線約760Km, 若い北川は全線を踏破したという。ソヨルジ山にも登頂し, 「満蒙支三国境のオボは西方約20Kmの山顛にあり」[北川(1979)]と記す。

国境については「満洲国政府は合同現地調査を実施, 外交部はハルハ河国境説を否定する報告書を作成して, 日本国外務省, 関東軍, 陸軍省, 参謀本部へ送付」[北川(1979)]とある。

「参謀総長への出張報告」(1938年10月 矢野光二^⑬少佐)

蒙古服を着しブリヤード(蒙古)人複数名を連れ調査, 「今回の調査によって境界はハルハ河と判定」と報告。

北川(1979)は「一回の巡視をもって(ハルハ河右岸の)支配が実効的であったなどと, 誰が主張できるだろうか」と疑問を呈している。特に, ハルハ河では左岸を併進する外蒙監視兵が矢野らに対して何ら妨害行為をとらなかったという事実を以て境界がハルハ河と確認したとしている。外蒙兵は矢野らが測量するでもなく単に通行している民間蒙古人と視認したので, 妨害行為をとらなかっただけであろう。筆者も北川の見解に同意する,

⑫ 1935年5月満洲国外交部採用 大正2年(1913)生。現地調査報告書は北川が作成したが, 「誰も報告書に注意を払わなかった」と回想している。本論文を作成するにあたり, 筆者は「現地調査報告書」を探索したが, 結局不明。

⑬ 1897年生, 陸士32期, 蒙古語に精通, 調査当時はハイラルの特務機関員で少佐。極東軍事裁判で日本側証人として出廷陳述。

4. 停戦から国境画定まで

停戦合意(1939年9月15日)直前に, 日本側は次の拠点を駆け込み占領した。ハンダガヤ以南の実効支配を目的にしていたからである。特に, ネメルゲン河^⑭とハルハ河(アルシャン方面から流れ来る)が合流する地区(1031高地三角山^⑮)の確保は, アルシャン, 伊爾施, ハンダガヤを経て, ノモンハンに至る兵站道路(鉄道敷設計画もあり)の安全確保のために急務であった。

9月7, 8日 片山支隊(歩兵第16聯隊宮崎大佐)の夜襲によるエルス山^⑯地区の奪取

8月26日～9月11日 第3独立守備隊深野大隊^⑰等による三角山, 1035高地^⑱, ハルハ山^⑲(三角山の南)の奪取。

⑭ 努木爾根／訥莫爾根／ヌムルグ キリル文字表記 Н у м р э г и й н .
緯度経度 47.326329, 119.480177. 上流満蒙国境付近 46.90232, 119.92005

- ⑮ 8月26日占領 緯度経度 47.325746,119.520382
- ⑯ キリル文字表記 Э р и с 緯度経度 47.543224,119.144065
- ⑰ 戦史叢書関東軍<1>(1969)に既述がないうえ、秦(2014)で三角山の戦闘について「…日本軍戦死者は9名にすぎず、ノモンハン戦全体を通じ珍しい快勝…」の記述があり誤解を与えかねない。戦死者9名は後藤支隊に属した兵士(歩兵第49聯隊速射砲中隊岡崎中尉指揮)の死者数である。深野大隊の歩兵だけでも、戦死者は多数に上っている。このため戦闘報告を末尾の附録に記す。大隊の奮闘勇戦には敬意を表するが、停戦(9月15日)に救われなければ大隊全滅の可能性もあった。
- ⑱ 三角山の東方にあり。緯度経度 47.326170,119.600143.
- ⑲ 緯度経度 47.297592,119.563627. 秦(2014)が示す1079高地はハルハ山ではない。

停戦合意後、12月からチタ及びハル濱で国境画定交渉が実施されたが難航。漸く東郷大使とモロトフ人民委員との交渉(モスクワ)で1940年6月に現地国境画定委員会設立の仮合意に至る。この後、日本は1940年8月、さらに既成事実化を図るため1401高地^⑳(飛付山/М а н б м), 1304高地^㉑(勝山/А ш у г м)付近に軍を進駐、この時測量に来たソ蒙軍と衝突したが撃退し、8月14日1401高地を占拠。交渉過程であったが、ソ連側の非難や抗議はなかった。

1940年9月から現地で測量による細部の画定作業を開始。フラト山^㉒起点で北西ボイル湖^㉓までを第一小委員会(測量ソ蒙側担当、日満側委員長坂東通邦工兵少佐、委員には北川四郎、通訳兼秘書として満鉄社員石田喜與司も参加)、フラト山から南東アルシャン西方地区までを第二小委員会(測量日満側担当、日満側委員長島義工兵少佐)が担当した^㉔。しかし、現地での画定作業も同年11月末で物別れに終わり成果がなかった。

しかし、日ソ中立条約の締結(1941年4月)、欧州情勢の緊迫急変(1941年6月独ソ開戦)によりソ連側が態度を軟化。1941年6月から現地作業を再開し、順調に進展、8月17日にノモンハン紛争地域の全国境線に亘り国境標石^㉕及び標柱の設置を完了。

- ⑳ アルシャン西方14Km。外務省執務報告では1417高地。緯度経度 47.14190,119.76647.
- ㉑ 緯度経度 47.080934,119.804716。後掲する関東軍測量図では1324高地。
- ㉒ 970高地、キリル文字表記 Х у л д , ホラト山とも記す。
緯度経度 47.664798,119.122844
- ㉓ 貝爾湖、ボイル湖。緯度経度 47.758917,117.626028
- ㉔ アマラルティン以南、つまり満蒙支三国境界(ソヨルジ山)までを、画定作業に含めなかったのか不明。紛争地域ではないという解釈をしたのか。詳細な経緯は5項参照のこと。
- ㉕ 地区番号の1から17の地に標石を、途中の屈折点に標柱を設置

地区番号1	ホイト・エリグ	ムホル・オボ	国境線の延長	6.08Km
地区番号2	ムホル・オボ	ブフィン・トロゴイ	同	17.56Km

↓

地区番号 13	ウルスール	ベリチル	同	74.60Km
地区番号 14	ベリチル	ハッタ・オーラ	同	3.17Km
地区番号 15	ハッタ・オーラ	ノゴッタ・オーラ	同	4.97Km
地区番号 16	ノゴッタ・オーラ	17 アマラルティン・オーラ	同	7.65Km
			合計	256.79Km

ここで国境画定交渉の対象範囲について述べる。満蒙国境は北の満蒙ソ三国境界から南の満蒙支三国境界まで全線約 760Km である。しかし、画定交渉で対象とされたのは、ボイル湖北(ホイ・エリグ)からアルシャン南西のアマラルティンまでの僅か 256Km であったという事実に留意したい。つまり 256Km 以外は紛争地域でないという考えである。測量当事者の島(1973)も画定したのは 270Km の感覚である。

秦(2014)は「ボイル湖自体とその西方地区は交渉の対象から外れてしまう。日本軍の地図はボイル湖南端から西南へ旧紛争地のオラホドガ^㉔(オランホドック)、タウラン^㉕を結んだ線を国境線としていたが、ソ蒙軍の地図はオラホドガで西北へ延びる線を描き、満領へかなり入りこんでいた。この線は 1962 年の中蒙協定^㉖で追認されている。日本も 41 年以降、それを黙認していたと思われるが、詳細は不明である」と重要な点を指摘している。筆者も同感である。ボイル湖南西、オラホドガ・タウラン地区も紛争地域であるが、何故画定作業で除外されたのであろうか。

㉔ 緯度経度 47.647920,117.372597

㉕ 緯度経度 47.420797,117.075626

㉖ 詳細は不明、1960 年 5 月 31 日には中蒙友好相互援助条約締結。続いて、1962 年に中国とモンゴルの国境画定[例えば島(1973)、ボルジギン(2020)]。また、1963 年にソ連援助の下でモンゴル南部国境の防衛を強化する議定書締結。さらに、1966 年 3 月、ソ連軍のモンゴル駐留に関する協定を両国間で締結。

5. アルシャン地区の日ソ両国の主張(日本外交文書、外務省執務報告より)

(1) 1939 年 9 月 15 日停戦合意の追加条項

停戦合意後、東郷とモロトフ間で「満蒙国境画定委員会」の構成、業務などの細目を取決める。そうして同委員会業務規定の4項で「國境確定ノ範圍ハ最近紛争ノアリタル地域ノ満蒙國境トス」と明記された。しかし、その後「紛争ノアリタル地域」の解釈で、冒頭から双方に齟齬が生じた。

10 月 10 日 東郷・ロゾフスキー会談

日本側:「最近紛争ノアリタル地域」の具体的内容、紛糾を予測し 9 月 26 日下記のように2案を用意する。

第一案 「ボイル」湖以東「ソヨルヂ」山ニ至ル満蒙國境

第二案(最終案) 「ボイル」湖以東ヨリ「アルシャン」河南方戰鬪地區(一〇三一高地)附近ニ關聯スル地帯(「ネメルゲン」河東方地帯ノ北部)ノ満蒙國境

ソ連側：アルシヤン河南方の戦闘地区の意味を解せず。催促して漸く「紛争地域の定義について、委員会にて話し合われるべきもの」との返答あり。

日本側：「[東郷]大使ハ紛争發生地ノ認定ハ委員會ニ於テ之ヲ爲スヘキ性質ノモノニアラス」と述べ、さらに東郷・モロトフ申し合わせに反するとして拒否。

ソ連側：これに対し、専門家が調査し後日回答すると約す。

ソ連側：何ら反応、回答無し。

日本側：「然ルニ其後「ソ」側ヨリ此點ニ關スル回答ナク、徒ラニ斯カル問題ノ爲兩國間國交調整ヲ迂延スルハ不得策ト思考シタルニ付、我方トシテハ本件地域ヲ豫メ具體的ニ明定スルコトヲ止メ、「最近紛争アリタル滿蒙國境」ナル漠然タル區域トシタル儘會議ニ臨ミ「アルシヤン」河南方地區ハ結局政治的交渉ニ依リ解決スルコトニ方針ヲ決定セリ」

11月13日東郷・モロトフ会談

日本側：「アルシヤン」河南方「一〇三一」高地ニ於テモ紛争アリタルコトハ明白ナルニ依リ、右地域ヲモ之ニ包含セシムルコトハ當然ニシテ、具體的ニハ「ネメルゲン」河以東外蒙カ自己ノ領域ニ屬スト主張セル地域ヲ包含セルモノナリト述ヘタリ。

ソ連側：「モ」ハ右地域ノ餘リニ廣大ナルニ驚愕ノ色ヲ示シタル趣ニシテ、

日本側：結局本委員會ハ紛争アリタル場所ヲ調査シ、「ノモンハン」地域以外ニモ之ニ當スルモノアルコト明カトナリタルトキハ、右場所附近ノ地域ニ付テモ國境ヲ確定スルコトノ諒解ヲ附スルコトヲシタシト述ヘタルニ對シ、

ソ連側：「モ」ハ之ニ同意セリ。

(筆者見解)

日本側は最初から最後までボイル湖南西、オラホドガ・タウラン地区の紛争事件は提起しなかったようである。また、モロトフは真に 1031 高地付近の戦闘事実を知らなかったのであろうか。知らない振りをしたのか。筆者は、1031 高地付近の戦闘はソ連軍にとっては「負け戦」であるため、不都合なので軍から外務省(モロトフ)に報告されなかった、と推測する。

(2)1939年12月 チタ会議

日満側：ネメルゲン河を遡リソヨルジ山に至る線が国境線。アルシヤン河南方地区の全有を主張。

ソ蒙側：アルシヤン河が国境線。当該地区[アルシヤン河南方]の日満軍の不法占拠は認めず。但し、鉄道敷設のための替地は考慮。

(3)1940年1月 哈爾浜会議

日満側：ネメルゲン河第2支流以南をソ蒙側に譲る妥協案を示す。

ソ蒙側：妥協案は示さず。さらに日満側の妥協案も認めず。非公式会談では第2支流を承認した

ものの、最終的に決裂する。

(4) 1940年3月から7月迄 モスクワ交渉

日本側：国境はネメルゲン河の第1支流^②。さらに原案は「ネメルゲン河第1支流と東部国境線^③との接合点以南の国境線については、ソヨルジ山に至る」としたが、ソ連側は「1075高地^④に至る」とある。あたかも満蒙国境が1075高地で終わるような印象(誤解)を与えて「1075高地に至り、さらに進むものとす」の折衷案を以て妥結。

また、正確を期すため全国境に2万5千分の1地図を作成することのソ連側提案に同意。

ソ連側：同意。なおソ連側20万分の1地図には、第1支流やソヨルジ山の記載なし。

② フジール(フヂール)河／キリル文字表記 Х у д ж и р , ソーダ河／曹達河。

ネメルゲン河がハルハ河と別れる分岐点より8Km上流にある支流。

緯度経度 47.244510,119.57590。

③ アマラルティンからソヨルジ山までのこと。同区間の国境線の画定は、既にこの時点で合意されていたことになる。

④ 後述③を参照のこと。

(5) 現地確認作業(1940年9月から11月)

冒頭の段階で紛糾し双方物別れ、従ってアルシャン地区まで作業に至らず。

(6) 1941年5月チタ会談及び6月から現地画定作業

合意事項 ・経緯度による屈折点選定方法に日本側同意

・関東軍作成の10万分の1地図(1935年)の採用に露側合意

・第1支流の上流12Kmを屈折点^⑤とする。

・標識は、フラト山以北はソ蒙、以南は日満で維持管理する

但し、ソ蒙側は、同屈折点[ベリチル]から南にある「1350」高地^⑥を結ぶ直線を国境線と主張。その後、最終点(終末点)は「1350」高地南方約1.4Km地点に変更。日満側は、同屈折点から西南方にある一高地を経て、「1350」高地、さらにその西南1.7kmの地点にある高地を、逐次直線を以て結ぶ線を国境線と主張。「1350」高地は東郷・モロトフ申合附属地図^⑦に記載する「1075」高地と略々合致すると認識。確定作業は「1350」高地を以て終末点とする。

⑤ 地区番号14のベリチル/キリル文字表記 Б е л ь ч и р ,

緯度経度 47.19388,119.70873

⑥ 1075高地にほぼ一致。即ち1350高地(ソ蒙側)≒1075高地(東郷・モロトフ合意)≒アマラルティン(緯度経度 47.06667,119.8 画定作業の終末点)と考える。

③4 1935 年赤軍参謀本部発行 20 萬分の一地図

外務省執務報告欧亜局(1941)は「ソ」聯製二十萬分ノ一地圖ハ右一〇七五高地ノ南方僅カノ個所ニテ終リ居ル關係上同地圖ニ「ソユルジ」山迄ノ線ヲ劃スルコトハ事實上不可能ナリシ次第ナリ」としている。ただ、ソユルジ山以南は、満洲国と外蒙古は国境を接せず。即ち、ソユルジ山は満洲国、外蒙古、内蒙古(支那)三国の境界と、ソ蒙側、日満側も理解しているようである。

6. 満蒙支三国国境のソユルジ山はどこか？

古くは、清の乾隆帝が興安嶺に登った時に作った次の詩に、その名がある。

「カンアイ、アルタイに右臂を舒べ、ソユルギー左肩に憑る」

(1)ソ連側の認識

「ソ」満国境地図(昭和 12 年重光駐ソ大使が外務省に送付)には、満洲国、外蒙古、内蒙古(支那チヤハル省)三国の境界に「С о ю л ц з н」と記載あり、これがソユルジ山を指すのであろう。

また、「Russian army map」(図 3 20 萬分の 1)に「С о ё л д э (С о ё л ђ э)」(標高 1502m)の記載がある。その緯度経度は 46.666059,119.903981 である。

(筆者見解)

「Russian army map」では白杜線はハンダガヤまで開通したようになっている。しかし白杜線は終戦時(1945 年)には、杜魯爾(緯度経度 47.397750,119.634761)が終点駅で、ハンダガヤまでは未開通であった。さらに、同図の朝鮮の部分では、38度線付近の非武装地帯が描かれている事から、少なくとも朝鮮戦争の休戦協定が発効された 1953 年頃以降の状況を示したソ連作成地図と思われる。

また、「Russian army map」には、旧満蒙国境線(С о ё л д э 山から少なくともボイル湖西部まで)に, по г р с т в [о р](地図では露語筆記体, 国境標識の意味)の表記があり, No〇〇〇が付されている。これらの標識は、ソ連がМНР(モンゴル人民共和国)とК И Т А Й(中国, 恐らく中華人民共和国)との間に介在し、両国の国境線を明確化するため設置を支援したものと思われる。1950 年代末までは、ソ連はモンゴルとは勿論だが、中国ともまだ友好的関係にあったので、ソ連が標識設置を仲介できたのであろう。以上から、「Russian army map」は 1953 年から 1959 年頃の状況を表していると考えられる。なお、余談だが紛争の一場所となったハルハ廟も、この図ではР а з в. Х а л х ы н - С у м з と表記され、既に廃墟となっていることに留意されたい。

(2)支那(中国)側の認識

宝格达山, 属大興安嶺。在[内蒙古]自治区中部, 東烏珠穆沁東部。"宝格达"系蒙古語, 意為神聖。他称“索岳而濟”……海拔 1504.4 米。是烏拉盖, 海拉斯台, 哈拉哈河發源地。…

洮兒河…發源于大興安嶺東麓索岳爾濟山[索岳爾濟山], 東南流經大石寨…

歸流河…洮兒河支流…發源于大興安嶺西麓宝格达山, 向東流…

(筆者見解)

「中華人民共和国地名大詞典」(2002)に記されているものだが、同時代史料でないので注意を要する。特に、山岳の項では宝格达山＝索岳爾濟山としながら、河川の項では別個の山として扱っており、注意を要する。

(3) 日本側の認識

ア. 日露第三次協約(1912)に基づく日露の認識

日露戦争後、日露第一次協約(1907)の秘密協定で満洲を南北に分割し、日露の勢力範囲を区分とした。しかし、西端部は索倫^㉔付近までであったので、更に第三次協約で次のように明確化した。

「…前記[南北]分界線は托羅河^㉕とグリニッチ東経 122 度との交叉点より出て、ウルンチュール河^㉖およびムシシャ河^㉗の流れよりムシシャ河とハルダイタイ河^㉘の分水線に至り、これより黒龍江省と内蒙古との境界線により、内外蒙古境界線の終端に達す」

(筆者見解)

明治末年に日本側が、これだけの河川名とその位置を把握していたことには驚く。但し、河川名は支那の呼称をそのまま踏襲したものであろう。

五叉溝^㉙を過ぎて洮兒河は分岐、本流洮兒河は北に向かい白狼方面へ、支流は西北西へ直進し、2 kmの所で更に南に分岐、分流ツァガン河^㉚は一旦南に折れ再び北流、この屈折点で分流ムシシャ河はそのまま西へ進む。上記の協約にソヨルジ山の表記はないが、ムシシャ河の延長線上の南に満蒙支国境(内外蒙古境界)、つまりソヨルジ山(ボゴドオロ・オポー)が記されている(関東軍作成図)。まさに、ムシシャ河とハルダイタイ河の分水嶺である。

㉔ 緯度経度 46.6176,121.236

㉕ 洮兒河 緯度経度五叉溝 46.76515,120.29192 及び白狼方面 46.77457,120.27931

㉖ 不明、查干河(キリル文字表記Ц а г а н)が分岐する本流の河川名か。

㉗ 緯度経度 46.680683,119.922095

㉘ 海勒斯台河(歸流河/クイレル河の一支流) 緯度経度 46.651731,119.912421

下流部緯度経度 46.374540,120.296817

㉙ 緯度経度 46.77153,120.29957

㉚ 查干河 緯度経度下流部 46.771901,120.215022 及び上流部 46.704140,120.012256

イ. 矢野、北川等の認識

矢野光二と北川四郎は実際に登頂しているので、彼らの記述を紹介し、位置を推定する。
<矢野光二(1938 年秋)>

調査の大綱

第一次…ネメルゲンゴル(ハルハ河の上流)をさかのぼり、索岳爾濟山(ソヨルヂボクトーラ…内外蒙と満洲領との境界)に至る間の調査。

第二次…ハロンアルシャン—ハンダガヤーハルハ河に沿う地区を調査し、…アムコロに至り海拉爾に出る。

「…その翌日はいよいよ[アルシャンから]索岳爾濟山^{そとるじオーラ}に向かった。進路を西南方にとる。小径が続く。ブリヤード人5名は……。地形は波状地で処々に灌木の疎林があり、その間に湿地が点在…挽き馬して、野地坊主^{やちぼうず}の上をとんでいく…ネメルゲンゴルもいつしか、わからなくなった。小径はかすかに続いている。索岳爾濟山に近づくにつれて、次第に密林となる。やがて水の湧いている所に出た。太陽はまだ高いが、この密林内に宿泊……。

前日にひきかえ曇り風が冷たい。一路林内を索岳爾濟山の頂上に向かう。もう小径はない。森林の中を挽き馬して進む。…しばらく進んだ頃、前方がひらけたので林空かと思ったら眼前に大きなオボとその両側に七個の小オボがつらなっていた。いつの間にか山頂に…。ここが内外蒙と満洲領の境界点だ。南方は一帶の森林に掩われて近くは展望し得えないが、遠く烏爾渾河流域が望見された。…そこで帰ることとし、進路を往路より東方にとる。…正午頃小憩…。こんな道草をしたが、折々速歩を加え日没近くハロンアルシャンに着いた」

(筆者見解)

アルシャン(標高約 1000m)から騎馬(常歩^{なみあし}100m/分、速歩^{はやあし}210m/分[騎兵操典(1912)])と徒歩(挽き馬)での一泊二日の行程。一日目は陽も高いうちに野営、二日目は登頂し、途中道草をしても日没前にアルシャン着。これからすると、ソヨルジ山はアルシャンから騎馬と徒歩で 8 時間行程/日の西南方に位置した、と考えるのが自然であろう。騎馬と徒歩を併用したので、時速は平均 9km と考え1日(実働 8 時間)に 60 から 70km の移動は可能である。また、ネメルゲン河(上流部 緯度経度 46.904875,119.951569)付近を通過していることや、頂上から南に烏爾渾河(烏勒盖音、ウルゲン、キリル文字表記 У л г а и н , 緯度経度 46.604007,119.909827)を望見できたことにも留意したい。さらに坂道(登り)の苦痛を表現していないので、アルシャンとの比高差は 400m 程度か。

ソ連や支那側の主張する С о ё л д э ・ソヨルジ山(緯度経度 46.666059,119.903981)までは、アルシャンから直線距離で約 56Km である。従って、矢野が当該山を「索岳爾濟山」と認識して登頂した可能性は充分ある。

<北川四郎(1937 年)>

「ソヨルギー山頂からの眺望は雄大。四方見渡す限り山また山。…満蒙支三国国境オボはソヨルギー山の西方約二〇キロの山巔にあった」

(筆者見解)

ソヨルジ山=満蒙支三国国境ではないようだ。また二〇キロは誤植ではないだろうか。正直北川のこの部分に記述は理解に苦しむ。

<秦(2014)>

「…第1次チタ会議ではネメルゲン河を遡り、ソヨルジ山(1504 高地, アルシヤン南方 1100Km, 別名は三国山で, 内外蒙古, 満洲国の国境点)に至る線を国境線にと主張…」とある。

(筆者見解)

外務省執務報告には下線部の記載はなく秦(2014)の注釈である。アルシヤン南方 1100Km の記述は明らかに間違いである。

<日満側各種地図>

索岳爾濟山の名称が記されている地図もあるが、緯度経度が明確でないので正確性に欠ける。しかし、関東軍作成の測図(昭和 10 年/図 4)に示す緯度経度は、信頼に足るものと考えられる。「Russian army map」と対比すれば、同図で「ソヨルジ山/С о ё л д э 山」は「ボゴドオロ・オポー」と記されていることが判る。なお、この図(ハロンアルシヤン, ネメルゲン河地区)には、満蒙国境線は記されてないことに留意して欲しい。

(筆者最終見解)

結論から云うと、矢野報告の信頼性が高いので、ソ連、支那側の主張するС о ё л д э ・ソヨルジ山(緯度経度 46.666059,119.903981)が索岳爾濟山(三国境)と判断したい。

なお、登頂は五叉溝からС о ё л д э ・ソヨルジ山までは、直線距離で約 30 km であるので、矢野はより近い同地に下車宿泊し出発すべきだが、宿(日本人経営)や案内人が見つからなかったのであろう。

7. おわりに

アマラルティンを国境画定の終末点として日本側が妥協したのは何故だろうか。アマラルティン以南で戦闘がなかったのは事実であり、つまり「紛争ノアリタル地域」と主張できなかったのであろう。しかし、アマラルティンさえ画定しておけば、アルシヤン方面の安全はより確保されることになるので、当面これで「よし」としたのではないか。

さらにアマラルティンからソヨルジ山(仮にソ連側主張の緯度経度 46.666059,119.903981 の場合)まで直線距離 45Km, ソヨルジ山の位置はソ連側とも一致。稜線や河川の状況により 45Km 直線から国境線は多少出入り(凸凹)するであろうが、大勢に影響がないと日ソ双方が解した、と考える。ソ連側にとっては、ハルハ河・ノモンハン(草原砂漠地帯)と違い当該地区は鉄道駅から遠く、兵站・補給に難があり、大兵力の集中運用は不可能、また山岳森林地帯で卓越する砲戦・戦車戦を有効に活用するのは不向き等、戦略・戦術面を考慮すれば、45Km 区間で紛争を引き起こし拡大させてもメリットはない。一方、日本側も紛争地区ではなく、今慌てて国境を画定する必要はない、むしろ「曖昧のまま」にしておいた方が今後により有利と判断したとも考える。

現在、アルシャン以南の中国とモンゴル国との国境線はウンドゲン・オボ、シヤラオレ、ツアガン・オボを結ぶ線より、以西にある。最終的な満蒙国境線(アマラルティンからソヨルジ山)も現在のようであったのであろう。ということは、ハンダガヤから南では、日満側がソ蒙側を押し込んだことになる。ハルハ河以東の地を失ったが、これを相殺して余りある土地を確保したのである。往時の外蒙古の将軍が悔しがったと云う気持ちも判る。

最後に筆者は、索岳爾濟山に関心があつてその位置を調査したが、標高、緯度経度を正確に記した日本側地図や史資料を中々発見できなかった。しかし、関東軍測量図(極秘)で、ほぼボゴドオロ・オボー＝索岳爾濟山＝ソヨルジ山＝C o ё л д э 山と確認できた。真に満蒙支国境に位置する三国山である。現在航空写真で山頂に中国側の国境監視所、鉄塔等が確認できる。

なお、「Russian army map」ではC o ё л д э 山(1502m)の2Km 西南西に、キリル文字表記 б а г а - б о г д - У л а (小さな神聖なる山 1414m, 緯度経度 46.655564, 119.878620)が記されており、この山が宝格達山の可能性もあり、これについては今後の検討課題としたい。

< 附録 >

独立守備歩兵^④第 16 大隊戦闘業務詳報 昭和14年8月26日～14年9月26日

○戦闘ノ概況[8月26日三角山の奪取] 戦闘図を  5 に示す。

1. 蘇蒙軍は「ノモンハン」方面の戦況に相策応し、6月以降頻次に亘り「アルシャン」方面及白阿線[鉄道]を空中攻撃し、且我が後方攪乱の目的をもって白阿線に対する謀略行為を企図。
2. 関東軍は急遽、「アルシャン」「ハンダガヤ」「旧ジャンジュン[将軍]廟」間の鉄道建設を企図し、8月中旬より測量に着手。大隊は一部兵力をもって之が直接援護に任ず。
3. 8月18日18時0分 興安省新巴爾虎左翼旗 1031高地[三角山]の占領を命ぜられ、直ちに深野部隊の編制に着手し、駐屯地興安省索倫より「アルシャン」[白阿鉄道の終点駅]に向け出発。8月26日5時20分再び「アルシャン」より自動貨車四台に分乗、1031高地に前進す。深野部隊の編成。
部隊長 歩兵中佐 深野時之助[陸士27期] 部隊本部 大隊長以下22名
牧野隊 一小隊(中隊長以下64名 MG[機関銃]一分隊を附す)
中岡隊 一小隊(中隊長以下66名 MG一分隊を附す)
山砲歩兵砲小隊長及指揮班(将校以下8名)
重富大尉指揮の輸送部隊(監視兵(乗馬)10, 苦力100)
4. 8月26日6時40分 阿爾善橋[伊爾施西北2.2Km, アルシャン河に架かる]に着。爾後阿爾善[アルシャン河/ハルハ河]左岸を警戒しつつ、8時30分同地出発 1031高地に向かい前進。
5. 17時部隊は1031高地東南方約1500mの「一文字山」に達す[阿爾善橋と一文字山間約20Km]。1031高地に敵の占拠するを視認。大隊は直ちに該敵を撃退すべく決す。
6. 17時35分、1031高地及東北側白樺林の敵騎馬兵約70名は我を俯瞰し…迂回行動により敵の左側背を衝く。

7. 1031 高地の敵稍々動揺の色をみせるや、中隊主力は部隊長を先頭に之に突入し占領。次いで馬足を駆って鉢巻山に後退せる敵の残敵を追撃。敵をハルハ河[ネメルゲン河]左岸地区に駆逐する。時正に 19 時 30 分。

戦線救護の状況

1. 8 月 26 日 8 時 30 分 阿爾善橋左岸より本道を離れ、山嶽地帯を戦備行軍の隊形にて 1031 高地に向け前進。当日は一点雲無き快晴にして地形は山嶽重畳の山地帯。然も日射を遮る一本の樹木無く、渴きを治するに水とて無し。且秋冷の時期とて夜間の気温低下を考慮し、各将兵は軍衣袴を着用。阿爾善橋出発後 1 時間にして落伍者を見る。目的地 1031 高地に近づくに従い熱汗淋漓として各兵の疲労甚だし。
2. 数度の小休止後、行軍を続行。16 時頃「一文字山」南方 1Km 附近に達するや、軽度の喝病患者数十名発生。満田衛生軍曹は…各衛生上等兵をして落伍者の背囊を負わしめ、或は銃を擔へ或は人工呼吸・注射等の処置に専念せしめ、恢復者…
3. 概ね処置を完了するや、一連絡兵来たり「一文字山」西北方に敵見ゆと報告す。鈴木軍医中尉は即座に満田軍曹以下に追及を命じ、一文字山に馬を駆って前進…。

[]は筆者の注

戦闘死傷表 戦闘参加人員

戦闘員 将校 14 名(内負傷 1 名) 准士官・下士兵 155 名(内負傷 2 名) 計 169 名

非戦闘員(衛生部) 将校 1 名 准士官・下士兵 6 名 計 7 名

- ④ 明治 43 年南満洲鉄道や附屬地の警備を主務として編成。満洲建国後は、鉄道守備任務が全満洲へ拡大。文字通り、匪賊(鉄道を脅かす)に対する守り専門の兵、攻めも得意とする精鋭部隊ではない。5 時前起床、6 時間強の行軍後戦闘、19 時 30 分に敵を駆逐。こういう部隊が善戦奮闘したことは記録に値する。

- 9 月 3 日晴 敵歩兵部隊、ハルハ河を渡河越境し、…我が陣地左側背を包囲せんとする。
- 9 月 5 日晴 囊に鉄道建設掩護の任務を以て「トラ河」[緯度経度 47.383271,119.629428]橋梁付近に在りし、独守歩第 15 大隊の黒崎中隊は第 3 独立守備隊長[宮澤]の命に依り、昨 4 日夜阿爾善河架橋点[緯度経度 47.341588,119.585221]に到着。直ちに 1035 高地に進出、今 5 日早朝同高地を確保。
- 9 月 6 日晴 永田中隊[16 大隊]は、白阿線牛汾台以東の鉄道警備及防衛を大島[大迫か]部隊に交代、本 6 日深野橋[緯度経度 47.341588,119.585221]に到着。明払暁までに 1035 高地及 1031 高地の中間、弾痕山西側稜線に展開。
- 9 月 8 日晴後小雨 大隊副官大村祐一郎は、後藤支隊^④増援の状況が無電により阿爾山宮澤部隊本部に連絡する為猛烈なる砲弾下に於て電文案を作成、無線手に打電を命じる時、敵砲弾を受け戦死、時に 15 時 30 分。

9月9日晴後小雨 今朝来, 後藤支隊先遣大隊の秋本部隊, 1035 高地方面に進出.

9月10日曇 将兵一同, 明日の出撃諸準備に忙し. 10時各隊長, 各部将校集め, 明11日の出撃戦闘に関し研究を行う^④.

[]は筆者の注

戦闘死傷表 戦闘参加人員(8月27日から9月10日)

戦闘員 将校24名(戦死2名 負傷1名) 准士官・下士兵408名(戦死16名 負傷21名)
計432名(戦死18名 負傷23名)

非戦闘員(衛生部等) 将校3名 准士官・下士兵8名(負傷1名) 計11名

④ 特別任務遂行のため一個歩兵聯隊を基幹として編成. 今回の場合, 指揮は歩兵第1聯隊長の後藤光蔵大佐がとる. 歩兵第49聯隊速射砲中隊も後藤支隊に臨時的に編入された.

④④ どこかの時点で三角山奪取から「三角山確保」又は「ネメルゲン河左岸へ敵を駆逐せよ」との作戦命令の変更(追加)がなされたのであろう.

○戦闘経過ノ概況[9月11日ハルハ山奪取]

1. ハルハ河右岸に越境し来れる敵は, [9月]10日に於いて総兵力狙撃1ヶ連隊, 砲兵1大隊を下らず. 戦車四台を伴う. …去る9月8日, 9日の如きは4, 5千発の砲弾を浴びせられる.
2. 新たに独守歩第5大隊及び坂本隊[坂本弥平中佐／第15大隊]を以て宮澤部隊[宮澤齊四郎少将陸士24期／第3独立守備隊長]主力を編成. …増援を命ぜられたる後藤支隊, 9月9日深野橋に到着. 三独守備隊長[宮澤]は後藤支隊も併せて指揮する.
3. 9月10日右翼隊となる深野部隊は出撃.
4. 総攻撃当日11日は朝来寒気頓につのり, 遂に雪となり剩え北西の烈風をうけ, 松山・ハルハ山附近一帯は粉々たる吹雪となる. 漆黒の暗夜各隊は所命の集結地「一文字山」北側谷地に5時10分集結.
5. 6時50分命令下達. 大隊は南一文字山東側稜線に展開. ……
6. 攻撃開始の命降る. 攻撃の重点を「ハルハ山」に集中. 歩兵は演習場裡にある如く, 着々と敵に近接, ソ蒙軍をハルハ山に圧迫し, 殲滅戦に移る. 牧野隊次いで中岡隊, 永田隊, 相前後して敵陣に殺到, 猛烈果敢なる突撃を敢行, 敵を「ハルハ山」に殲滅せり. 時正に11時25分.
7. 11時40分大隊はハルハ山を確保.

[]は筆者の注

戦闘死傷表 戦闘参加人員

戦闘員 将校20名 准士官・下士兵376名(戦死3名 負傷7名) 計396名

非戦闘員(衛生部等) 将校3名 准士官・下士兵11名 計14名

<参考文献>

- ・秦 郁彦, 2014, 明と暗のノモンハン戦史
- ・石田喜與司, 1985, 帰らざるノモンハン(日満ソ蒙国境確定交渉秘話)
 附録矢野光二大佐のハルハ河, ノモンハン方面踏査記
- ・防衛庁防衛研修所戦史部, 1969, 戦史叢書関東軍<1>
- ・北川四郎, 1979, 元満洲国外交官の証言 ノモンハン
 「米軍にあった唯一の古地図の写し」あり
- ・ボルジギン・フスレ, 2016, 国際的視野のなかのハルハ河・ノモンハン戦争, 12章 満洲測量事情とノモンハン地区の境界線／大堀和利, 235-266
- ・ボルジギン・フスレ, 2020, モンゴル・ロシア・中国の新史料から読み解くハルハ河・ノモンハン戦争
- ・田中克彦, 2009, ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国
- ・伊東六十次郎, 1983, 満洲問題の歴史(上巻)
- ・兵用図書, 1912, 騎兵操典
- ・外務省欧亜局第1課, 1942, 日「ソ」交渉史(復刻版 1969, 巖南堂)
- ・外務省, 1941, 外務省執務報告欧亜局第3巻 (復刻版 1994, クレス出版)
- ・ソ連邦陸軍, 1980, Russian army map(ロシア陸軍地図)
- ・崔乃夫, 2002, 中華人民共和国地名大詞典第四巻, 6045.
- ・小沢重男, 1994, 現代モンゴル語辞典改定増補版
- ・外務省, 2013, 日本外交文書 昭和期Ⅲ第1巻(昭和12—16年 外交政策・外交関係)ノモンハン事件, 424-466.
- ・谷光世, 1982, 満洲地名考, 83, 91.
- ・和久利誓一, 飯田規和, 新田実, 1992, 岩波ロシア語辞典
- ・島義, 1973, 満州雑感:満洲測量夜話.
- ・外務省, 1965, 日本外交年表並主要文書(上)

<アジア歴史資料センター>

- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13010536600, C13010538900 独立守備歩兵第16大隊 戦闘業務詳報 昭和14年8月26日～14年9月26日(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B13080898900, 「ソ」満国境地図送付の件 昭和12年10月20日～昭和12年11月24日
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B02031260400, 満蒙現地国境画定委員会(昭和十六年度作業関係)(「チタ」、現地及哈爾賓)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C01003295400, 満蒙国境要図提出の件 昭和12年8月30日

<国会図書館所蔵地図>

・チユルヒネーラ東部 清國內蒙古（假製蒙古十万分一圖；烏珠穆沁 1 號）

地図 參謀本部, 陸地測量部, 臨時測圖部 [作] 縮尺 1:100000 參謀本部, 1913.10

その他；地図 1 枚；46×56cm

・ネメルゲン河 興安東省喜扎[カツ]嘎爾, 興安北省新巴爾虎左翼旗（滿洲十万分一圖；西 7 行北 8 段 貝爾湖 5 號）

地図 參謀本部 [作] 縮尺 1:100000 參謀本部, [1935] その他；地図 1 枚；46×59cm

・ハロンアルシヤン 興安北省新巴爾虎左翼旗（滿洲十万分一圖；西 7 行北 8 段 貝爾湖 4 號）

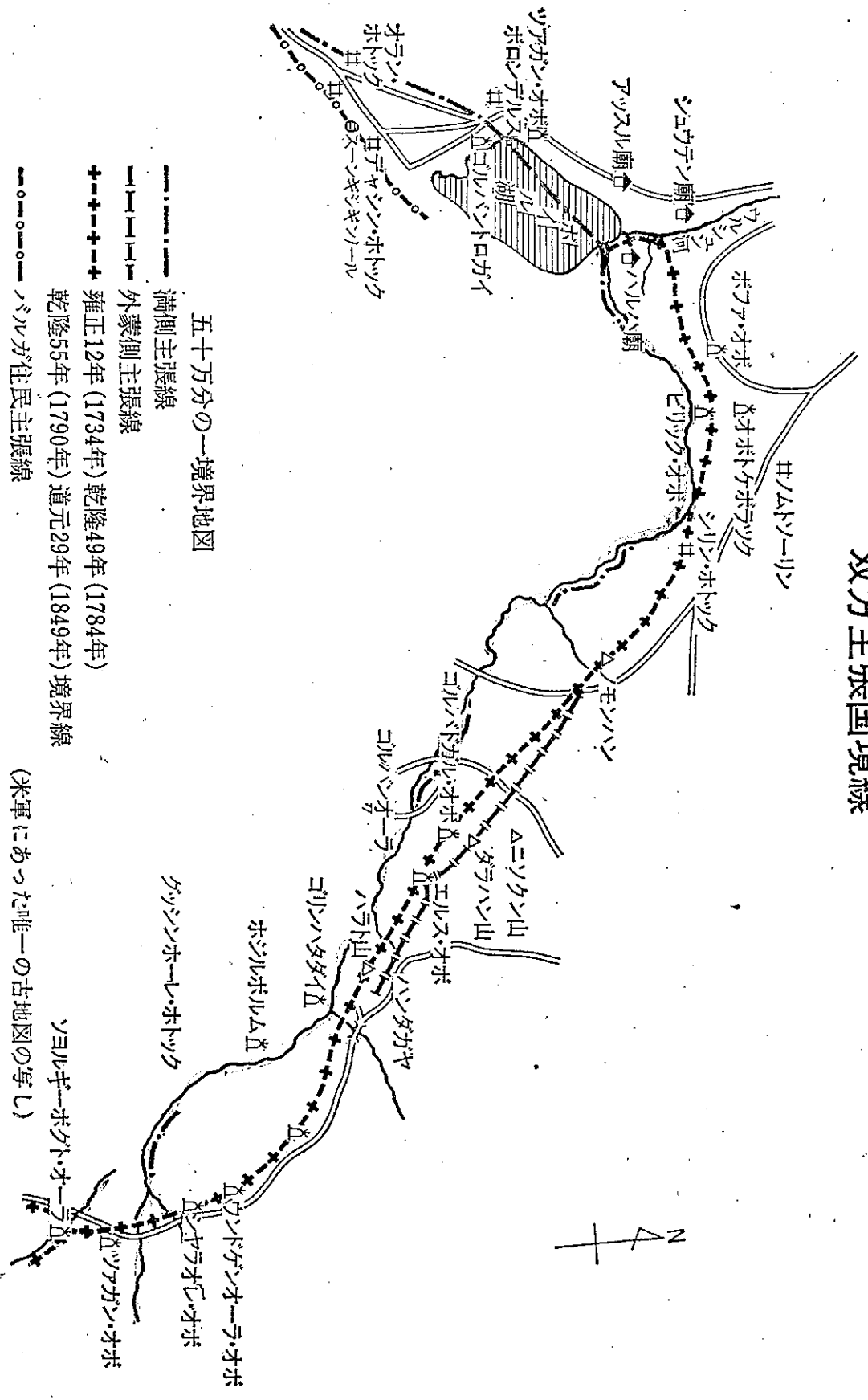
地図 參謀本部 [作] 縮尺 1:100000 參謀本部, [1935] その他；地図 1 枚；46×59cm

・五叉溝 興安東省喜扎[カツ]爾旗・興安北省新巴爾虎左翼旗・興安南省科爾沁右翼前旗（滿洲十万分一圖；西 6 行北 8 段 扎賚特 25 號）

地図 關東軍測量隊, 陸地測量部 [作] 縮尺 1:100000 參謀本部, [1935] その他；地図 1 枚；46×58cm

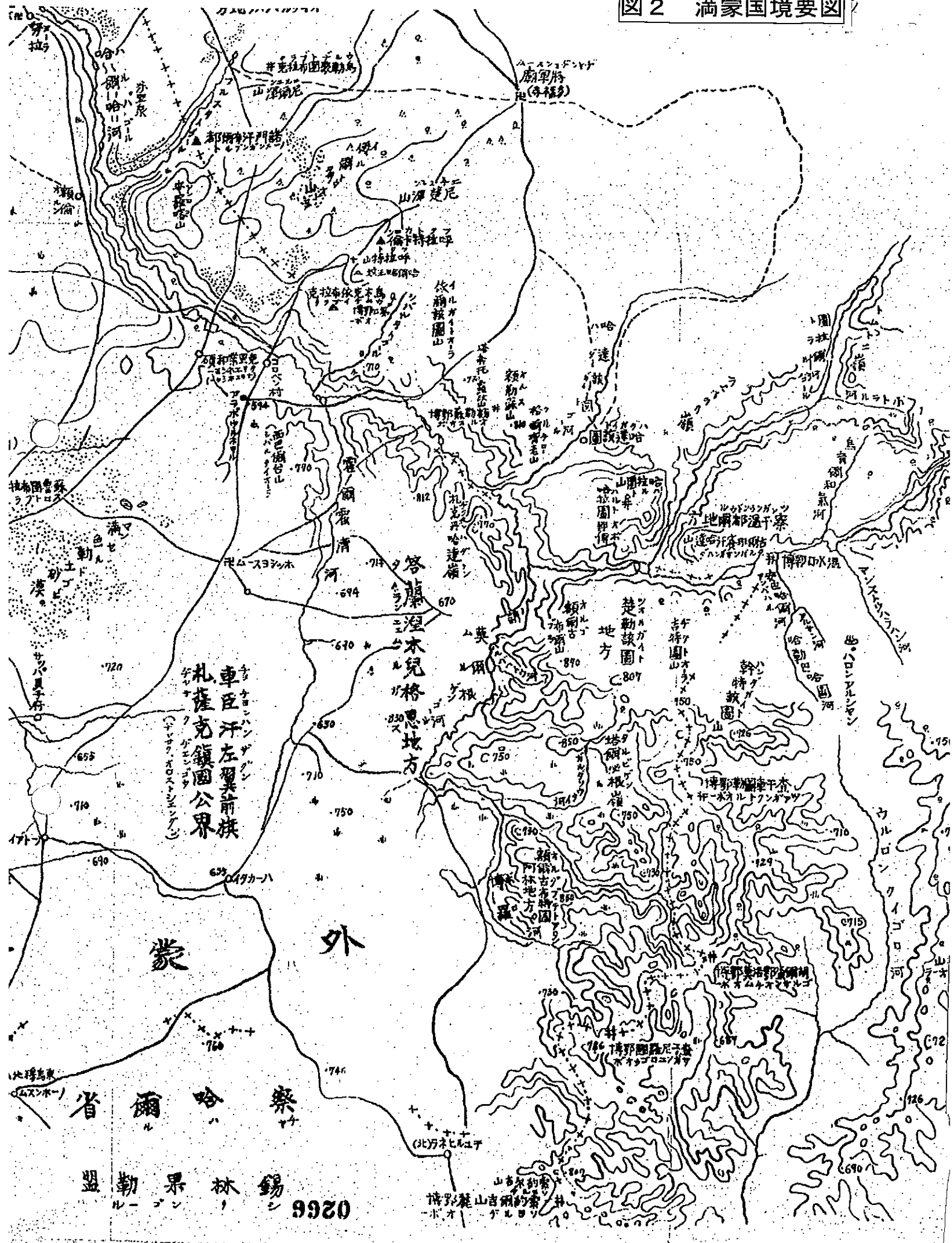
図1 米軍にあった唯一の古地図の写し

双方主張国境線

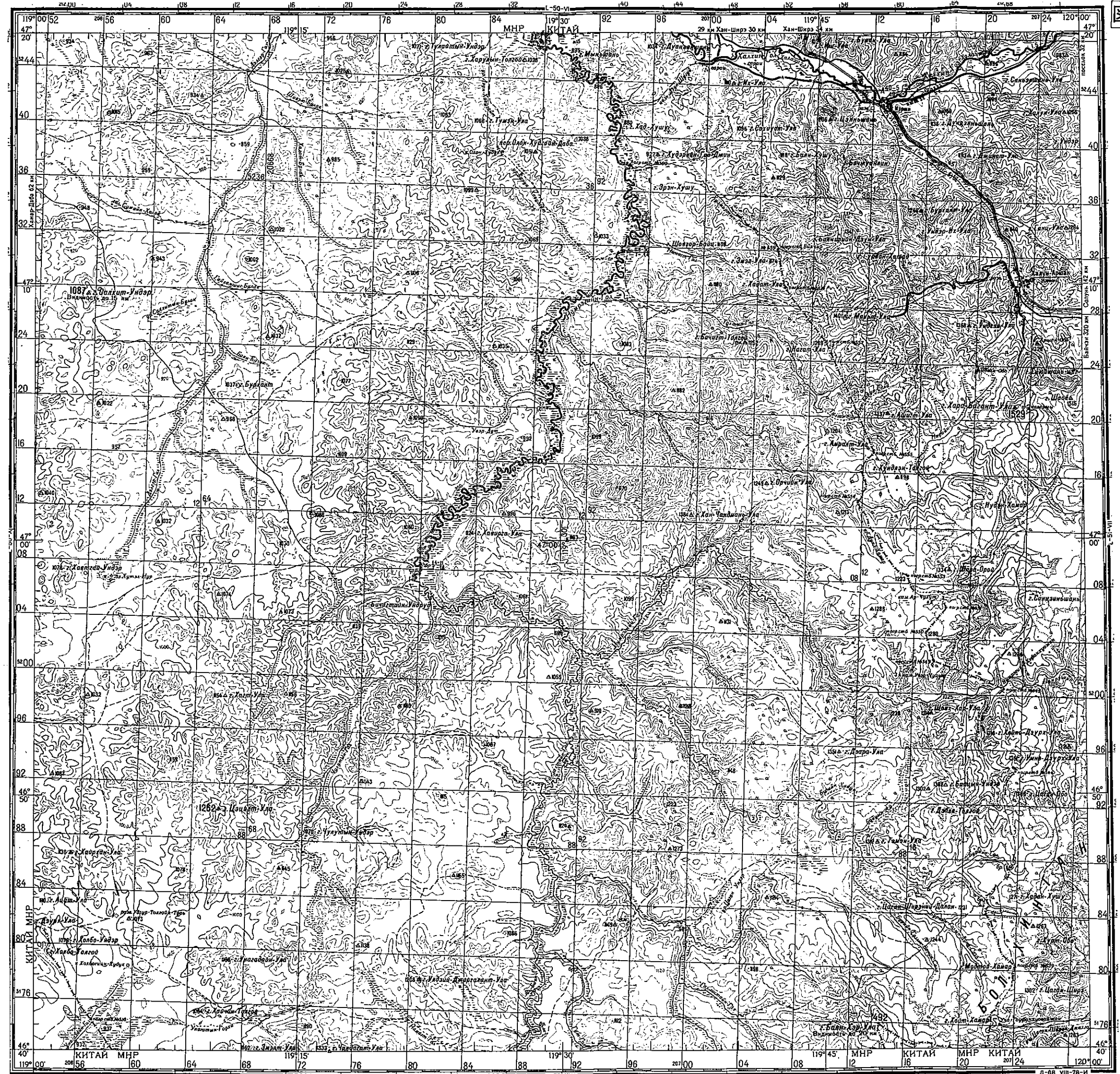


(米軍にあった唯一の古地図の写し)

图2 滿蒙国境要図



3 Russian army map

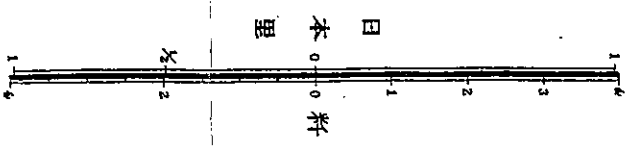
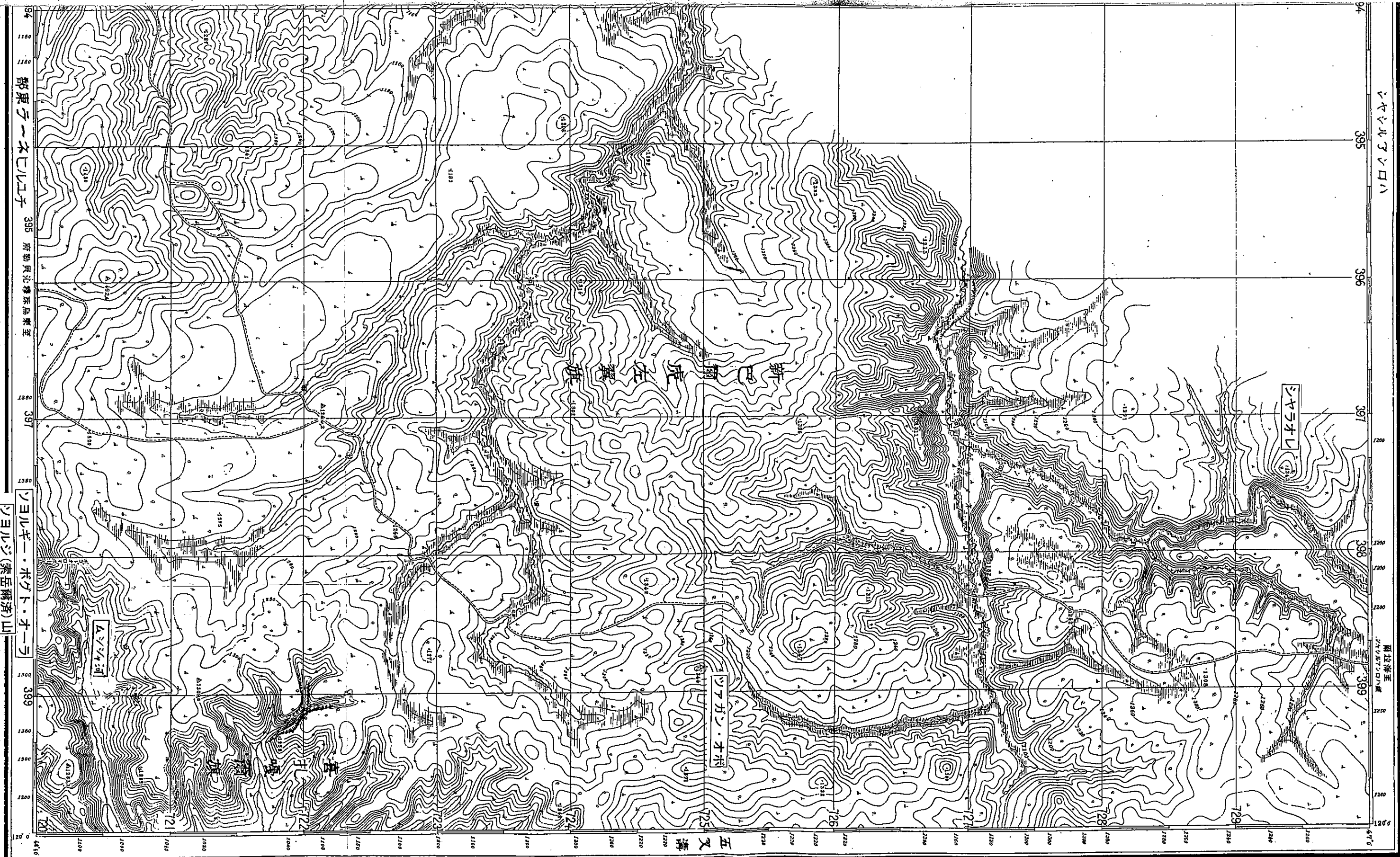


4 関東軍測量図 (極秘)

滿洲十萬分一圖西七行北八段貝爾湖五號

興安東省 善扎嘎
新巴爾虎左翼旗
興安北省 察哈爾
察哈爾左翼旗

ネメルゲン河



滿洲里

394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416

394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416

鄂東ラーネヒルユチ 395 府勤貝沁樓孫島東至

ソヨルギー・ボクト・オーラ
ソヨルジ(索岳爾濟)山

シヤラオロ

ソテガン・オホ

ムソノク河

新巴爾虎左翼旗

五又溝

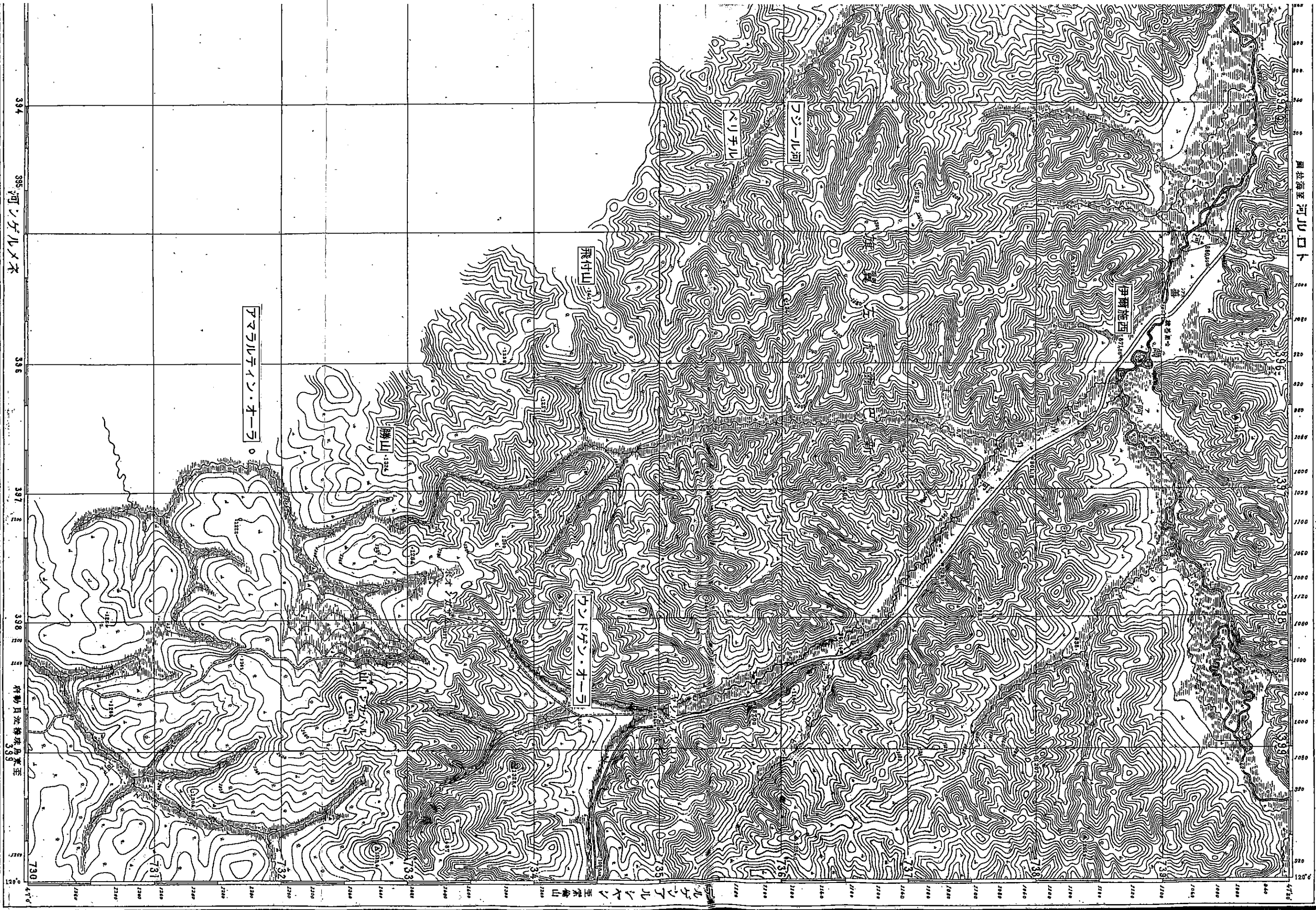
図 関東軍測量図 (極秘)

滿洲十萬分一圖西七行北八段員彌湖四號

ハロニアリヤン

興安北省 新巴爾虎左翼旗

日本 0 1 2 3 4
1
1/2 2
5
滿洲里 0



334 335 河シゲルメネ

336

337 府勢月定橋東島東至

338

339

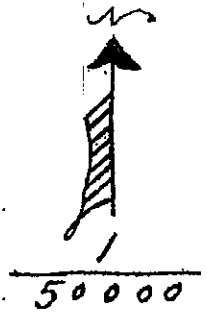
730

図5 1031高地三角山, ハルハ山付近戦闘図

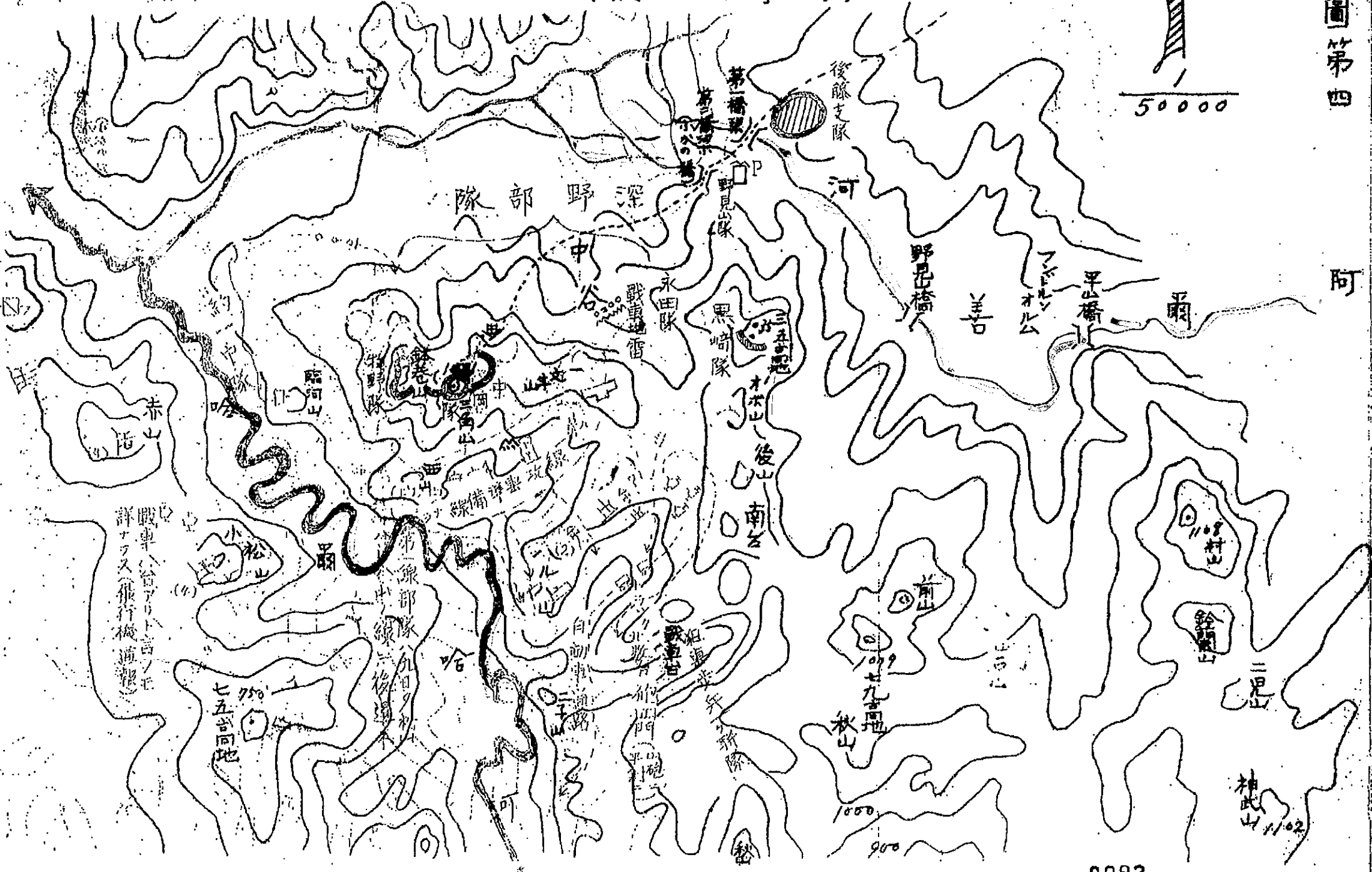
阿蘇山麓の戦況
（日 日 日）

一三高地附近彼我態勢要圖
（於九月十日日）

附圖第四



平野部はシ属リタルモノ約一隊
最近多少増加セラレタルモ、如シ



0092